日本語版不決断傾向尺度の信頼性と妥当性の検討

杉浦義典（信州大学　人文学部）
杉浦知子（日本学術振興会）
丹野義彦（東京大学大学院　総合文化研究科）

Reliability and validity of the Japanese version of the Frost Indecisiveness Scale

Yoshinori SUGIURA (Faculty of Arts, Shinshu University)
Tomoko SUGIURA (Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science)
Yoshihiko TANNO (Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo)

要　約

強迫症状と関連の深い意志決定の困難さを，強迫症状に限定されないパーソナリティ特性として測定する不決断傾向尺度（Frost & Shows, 1993）の日本語版を作成し，その信頼性と妥当性を検討した。非臨床群を対象とした質問紙調査の結果，以下のことが明らかになった。(1)不決断傾向は1因子構造であり，十分な内的整合性を示した。(2)不決断傾向は，強迫症状と正の相関を示した。(3)不決断傾向は，責任の認知および完全主義（ミスを恐れる傾向）との正の関連を示した。(4)不決断傾向は，一般的なパーソナリティ傾向（ビッグファイブ），および，責任の認知と完全主義で説明出来ない強迫症状の分散を説明していた（増分妥当性）。(5)否定的な思考の暴走を防ぐ認知的なスキル（認知的統制尺度の「破局的思考の緩和」）は，不決断傾向を低減できる可能性が示唆された。以上の知見から，日本語版不決断傾向尺度の一定の信頼性と妥当性が確認された。

キーワード：不決断傾向，強迫症状，質問紙，完全主義

Abstract

The psychometric properties of the Frost Indecisiveness Scale (Frost & Shows, 1993) were examined among the Japanese college students. Indecisiveness Scale was translated into Japanese and the questionnaire data revealed the following psychometric properties : (1) unifactorial structure with sound internal consistency, (2) positive correlation with obsessive-compulsive symptoms, (3) positive relation with the inflated responsibility belief and perfectionism (especially, concern over mistakes), (4) incremental validity over

the Big Five personality traits or responsibility and perfectionism in the prediction of obsessive-compulsive symptoms, (5) negative correlation with the self-report mindfulness skills (refraining from catastrophic thinking), suggesting the ways to reduce indecisiveness. Taken together, these results supported the utility of the Japanese version of Frost Indecisiveness Scale in the study of obsessive compulsive phenomena.

Key Words: indecisiveness, obsessive-compulsive symptoms, questionnaire, perfectionism

問題と目的

強迫性障害（obsessive-compulsive disorder：OCD）の一般人口における有病率は2％～3％と考えられる。さらに，強迫観念あるいは強迫行為というように強迫症状を個別に検討すると，非常に多くの人に強迫症状ないしはそれに類似した現象が見いだされる（杉浦，2002）。

強迫性障害の心理的特徴として，古くから意志決定の障害が指摘されてきた（例．Reed，1985）。戸締まりの確認を終えることに非常に困難を覚えるのは，意志決定の困難さを反映していると考えられる。意志決定の困難性の背景には，失敗を過剰に恐れる傾向があるとされる。自分の決断が間違いないかどうか確信がもてないために，意志決定を渋ると考えられている（Frost & Shows，1993；Salzman，1973）。

しかし，強迫性障害に本当に意志決定の障害があるかどうかを検証するためには，強迫症状の特徴から推測するのではなく，症状とは独立に，意志決定のスタイルを測定する必要がある。Frost & Shows（1993）は，それまでの多くの研究が思弁的な推測に基づいていた点を指摘し，15項目からなる不決断傾向尺度（Indecisiveness Scale）を開発した。Frost & Shows（1993）は，一連の研究で不決断傾向尺度の妥当性を検証した。

1．不決断傾向は，強迫症状との正の相関をしめした。とりわけ確認や疑惑，また溜め込みといった症状との相関を示した。
2．不決断傾向は，完全主義との正の相関をしめした。とりわけミスを恐れる傾向（失敗懸念）との相関を示した。
3．不決断傾向は，強迫症状以外にも，様々な種類の精神的症状と相関をしめした。
4．不決断傾向は，日常生活での様々な意志決定の問題と関連していた。例えば，不決断傾向の強い人は，様々な課題を先延ばしにしてしまう傾向があった。また，「どういった科目をとるか」，「余暇に何をするか」といった多くの生活の領域で決断の困難を感じていた。
5．不決断傾向は，実験室課題での意志決定の問題と関連していた。不決断傾向の強い人に，実験室で，様々な選択肢（服のカタログ，授業のシラバスなど）から選ぶ課題を行わせたところ，不決断傾向の弱い人よりも余計に時間がかかった。

つまり，不決断傾向の強い人は，強迫症状に限らず日常の様々な場面で意志決定の困難に

出会うことが分かった。さらに，このような一般化された不決断傾向は，強迫症状とも関連していたのである。

本研究の目的

本研究の目的は，Frost & Shows（1993）の不決断傾向尺度の日本語版を開発して，その信頼性と妥当性を検証することである。とりわけ，以下の点について検討する。

1．因子構造と内的整合性

2．強迫症状との関連

3．完全主義や責任の認知との関連

Frost & Shows（1993）が見いだしたように，不決断傾向は完全主義の中でもミスを恐れる傾向との関連が強いと考えられる。

また，近年の強迫性障害の認知モデルでは，過剰な責任感が重視されている。強迫観念の内容は，何らかの否定的な事態を予期させるものである。強迫性障害の人は，そのような事態に対する自分の影響力を過大視し，そのような事態への責任や，それを防ぐ義務感を強く感じてしまう傾向がある（Salkovskis, 1985）。例えば，「鍵を閉め忘れたかもしれない」という強迫観念が浮かんだときに，「もしも泥棒が入ったら自分のせいだ，そのようなことはなんとしても防がなくてはならない」と感じるのである。Frost & Shows（1993）は，不決断傾向が過剰な責任感と関連することを見いだしている。

4．強迫症状の予測における増分妥当性

完全主義や責任の信念のように，強迫症状と関連する要因は複数ある。他の予測要因と比較して，不決断傾向は強迫症状に対して独自の影響力をもつだろうか。これを重回帰分析を用いて検討する。独自の影響力があれば，他の変数に加えて，不決断傾向という新たな変数を研究する意義が明らかになる。

具体的には，まず，(a)パーソナリティのビッグファイブと不決断傾向の予測力の比較を行う。近年，症状特異的な予測変数（強迫症状の場合は，責任の信念など）のみならず，より一般的なパーソナリティ特性（外向性，神経症傾向など）と精神症状との関連が重視されるようになった。例えば，Brown, Chorpita & Barlow（1998）は，各種の不安障害やうつ病の症状がネガティブ情動傾向（神経症傾向とほぼ同じ）と関連することを見いだしている。また，Sexton, Norton, Walker & Norton（2003）は，神経症傾向と特異的な脆弱性要因（曖昧さへの不耐性など）の双方が，不安症状に対して独自の予測力をもつことを見いだしている。

次いで，(b)責任の信念および完全主義と不決断傾向の予測力の比較を行う。責任の信念（Salkovskis, 1985；Salkovskis et al., 2000）と完全主義（Rheaume, Freeston, Dugas, Letarte & Ladouceur, 1995）のいずれもが強迫症状との関連が明らかにされている。また，この両者とも不決断傾向と相関を示すことをFrost & Shows（1993）が見いだしている。

5．認知的統制との関連

不決断傾向が強迫症状を予測出来るのであれば，それをどのように低減出来るか，が強迫性障害の治療にとって重要になる。不決断傾向がミスへの懸念と関係するのであれば，「ミ

スをしたら恐ろしいことが起きるかもしれない」という破局的な思考法を改善出来れば，不決断傾向も低減する可能性がある。

通常，破局的な認知の修正は，認知療法によってなされる。認知療法では，抑うつは否定的に歪んだ認知によって生じると考え，治療では自らの認知を客観的に検討し，その誤りを修正することを目指す（Beck，Rush，Shaw & Emery，1979）。近年，効果的なセルフコントロールの増進という観点から，状況を客観的に分析したり，認知を修正したりといったことを，治療技法としてのみならず日常場面で自発的に用いられるスキルとして測定する研究が行われている。杉浦・馬岡（2003）は，認知療法の技法をもとに認知的統制尺度を開発した。ここでは，認知的統制が不決断傾向を低減出来るかどうかを検討する。

研究1では，因子構造と内的整合性を検討し，他の変数との関連は研究2で検討する。

研究1

目的

不決断傾向尺度の因子構造及び内的整合性を検討する。

方法

対象者　大学生359名（女性38%）。

質問紙　Frost & Shows（1993）の開発した不決断傾向に関する尺度。強迫性障害や強迫性人格障害の特徴とされる決断できなさを，より一般的な性格特性として測定しようとしたものである。15項目で，6項目は逆転項目である。項目は注意深く日本語に翻訳された。本来は5段階であるが，他の研究の目的（杉浦，1997）から，研究1の調査では，1（全くあてはまらない）～6（非常に当てはまる）の6件法で評定を求めた。

結果

因子構造　主成分法で初期解を算出したところ，固有値の変化（第1因子から順に5.09，1.71，1.37，1.07，0.94）から1因子性が示唆された。試みに2因子解（プロマックス回転）を算出したところ，逆転項目だけ（意志決定に困難のない状態）が別の因子を形成した。因子間の相関は.43と中程度であった。近年，不決断傾向尺度の正項目（不決断傾向）と逆転項目（決断ができること）を別の尺度として算出することも行われているが（Antony，2001），本研究では固有値の変化とスクリープロットの形状から1因子解を採択した。1因子解はデータの全分散の34%を説明していた（Table 1）。

内的整合性と基本統計量　α係数による内的整合性は.85で十分に満足のいく値であった。また，15項目の合計点は平均53.49，標準偏差10.90であった（ただし，研究1では，6件法であるため5件法で測定した場合との比較は出来ない）。

Table 1 不決断傾向尺度の因子分析（主成分法）

番号	項目	因子負荷量
1.	決断を先送りにしようとする	.67
2. *	自分の欲しいものはいつでもよく分かっている	.32
3. *	物事を決めるのは，簡単だと思う	.51
4.	自由な時間があると，何をして良いのか考えるのが大変だ	.40
5. *	決断をするような立場にいたい	.39
6. *	ひとたび決断したら，それにかなりの自信を持てる	.55
7.	メニューをみて注文するときに，何を頼もうかなかなか決められない	.62
8. *	物事はたいていさっさと決めている	.63
9. *	ひとたび決断したら，それについて思い悩むのはやめる	.60
10.	決断をするとき，不安になる	.68
11.	間違った選択をするのではないかと，よく心配になる	.75
12.	選んだり決めてしまったあとで，間違ってしまったと思うことがよくある	.60
13.	何からやったらいいのか分からないので，課題が期限に間に合わない	.51
14.	優先順位をつけられないので，課題を済ませるのに苦労する	.55
15.	ささいなことを決めるのでも，自分はとても時間がかかるようだ	.77

＊：逆転項目

研究 2

目的

症状尺度や関連する変数との関連から，不決断傾向の妥当性を明らかにする。

方法

対象者 大学生161名（女性55%）。

質問紙 不決断傾向以外に，以下の質問紙に回答をもとめた。なお，研究 2 では，不決断傾向は 5 段階評定である。

1．強迫症状：強迫症状を測定する 2 つの質問紙を用いた。まず，現在もっとも広く用いられている強迫症状の質問紙として，Sanavio（1988）による Padua Inventory（PI）を用いた。日本語版は，杉浦・丹野（2000）によって作成された。「疑惑」，「衝動」，「確認」，「汚染」，「正確」という 5 つの下位尺度がある。

また，PI より簡便かつ多次元に測定できる強迫症状質問紙である Obsessive Compulsive Inventory（OCI：Foa, Kozak, Salkovskis, Coles & Amir, 1998）も比較対照のために一部の対象者（64名）に実施した。日本語版は Sugiura（未発表）による。18項目で，「中和」，「強迫観念」，「確認」，「洗浄」，「順序」，「溜め込み」という 6 つの下位尺度をもつ。

2．完全主義：桜井・大谷（1997）による新・完全主義尺度を用いた。Frost, Martin, Lahart & Rosenblate（1990）による Multidimensional Perfectionism Scale（MPS）をもとにした多次元の完全主義尺度である。Frost & Shows（1993）は MPS を用いているため，結果の比較が容易になる。新・完全主義尺度の下位尺度から「完全欲求」（例，やるべきこ

とは完璧にやらなければならない)，「高い目標」(例，いつも，周りの人よりも高い目標をもとうと思う)，「失敗懸念」(例，ささいな失敗でも回りの人からの評価は下がるだろう)という3つを用いた。「完全欲求」は完全主義を最も一般的な形で測定したものである。「高い目標」と「失敗懸念」はぞれぞれ完全主義の固有の側面を測定している。「高い目標」は適応を促進する傾向があり，逆に「失敗懸念」は不適応と関連すると考えられる。新・完全主義尺度には，「行為への疑惑」という下位尺度もあるが，これは強迫症状の一部であるため（本研究ではPIの「疑惑」に相当)，重複を避けるために用いなかった。

3．責任の信念：強迫症状を悪化させる要因として，過剰な責任感が重要だとされる(Salkovskis, 1985)。Salkovskis et al.（2000）が作成した26項目からなるResponsibility Attitude Scaleを翻訳して用いた。項目例は「何かがうまくいかないと，自分に責任があると感じることがしばしばある」，「危険が起こるかもしれないのを予見出来たにもかかわらず，何もしなかったら，いかなる結果も私のせいである」といったものである。

4．ビッグファイブ尺度：和田（1996）の作成した60項目の特性形容詞からなる尺度を用いる。ビッグファイブは，下仲・中里・権藤・高山（1999）がCosta & McCrae（1989, 1992）のNEO-PI-R（Revised NEO Personality Inventory）を翻訳したNEO-PI-R人格検査や，辻・藤島・辻・夏野・向山・山田・森田・秦（1997）の作成したFFPQ（Five Factor Personality Questionnaire）など信頼性と妥当性が確認されている尺度がいくつかあるが，本研究では，性格特性語を用いている点でビッグファイブのもとの発想に忠実と考えられる和田（1996）の尺度を用いる。情緒不安定性（N)，外向性（E)，開放性（O)，調和性（A)，誠実性（C)，という5つの下位尺度からなる。

5．認知的統制尺度：杉浦・馬岡（2003）が開発した，認知行動療法的な技法をセルフコントロールのスキルとして自発的に用いる傾向を測定する尺度。不安になったときに，「まったくできないと思う」から「確実にできると思う」までの4件法で回答を求めた。12項目である。認知的統制尺度には2つの下位尺度がある。「論理的分析」は，問題に対する別の解釈を検討する，複数の解決策を産出し比較するといったスキルを測定している。一方，「破局的思考の緩和」は，否定的な思考が浮かんだときにそれに圧倒されず，破局的な思考をやめることができるスキルを測定している。杉浦（印刷中）は，「破局的思考の緩和」が様々な心理的症状と負の関連をもつことを見いだしている。

結果

強迫症状との関連　Table 2に，不決断傾向と強迫症状尺度との相関を示した。PIの場合も，OCIの場合も，不決断傾向は強迫症状の総合得点と正の相関を示した。これは，Frost & Shows（1993）の結果を確認したことになる。

溜め込み症状の下位尺度は，OCIのみに含まれるが，不決断傾向はこれと正の相関を示した。これもやはり，Frost & Shows (1993) やFrost & Hartl (1996) の結果と一貫している。

Frost & Shows（1993）は，不決断傾向は強迫症状の中でも確認症状とや疑惑症状と特異的な関連を示すことを見いだしている。一方，洗浄強迫とは関連がみられなかった。Table 2をみると，本研究の結果はこのパターンとはあまり一貫していない。PIの場合，不決断傾向は確認症状および疑惑症状に加えて，洗浄症状（「汚染」の下位尺度）とも相関を示した。

一方，OCI の場合には不決断傾向は確認と洗浄のいずれとも相関を示さなかった。

強迫症状のサブタイプ（下位尺度）との関連については，用いる尺度によって相違があるものの，不決断が強迫症状と関連するという点は追試できたといえる。

Table 2　不決断傾向と強迫症状との相関

	不決断傾向
Padua Inventory[a]	.44 ***
疑惑	.48 ***
確認	.38 ***
汚染	.33 ***
衝動	.15 +
正確	.13
Obsessive Compulsive Inventory[b]	.32 *
確認	.19
溜め込み	.26 *
中和	.29 *
強迫観念	.35 **
整頓	.17
洗浄	.15

+ $p<.10$；*$p<.05$；**$p<.01$；***$p<.001$
[a] $N=139$.
[b] $N=64$.

完全主義・責任の信念との関連　Table 3 にしめしたように，不決断傾向は完全主義のうち，失敗懸念のみと相関をしめした。これは，Frost & Shows（1993）の結果と同様である。高い目標は，完全主義の前向きな（適応的な）側面をあらわしていると考えられるが，これと不決断傾向には関連はみられなかった。

一方，強迫症状の予測因子として，近年有力視されている責任の信念とも不決断傾向は正の関連を示した。これも，Frost & Shows（1993）の結果と同様である。

つまり，不決断傾向は理論的に関連の密接な完全主義（失敗懸念）とともに，強迫性障害の予測因子として有力視されている過剰な責任感とも相関を示した。

Table 3　不決断傾向と特性変数との相関[a]

	不決断傾向
完全主義	
完全欲求	.12
高い基準	.07
失敗懸念	.37 ***
責任の信念	.34 ***
認知的統制	
論理的分析	−.15 +
破局的思考の緩和	−.40 ***

+ $p<.10$；***$p<.001$
[a] $N=131-161$（欠損値による）

強迫症状に対する相対的な予測力（増分妥当性）　不決断傾向は強迫症状との相関が確認された。しかし，強迫症状を予測する他の変数との相対的な予測力は不明である。そこで，研究2では重回帰分析を用いて不決断傾向の相対的な予測力を検討する。

1．ビッグファイブと不決断傾向の予測力の比較：パーソナリティ特性のビッグファイブと不決断傾向を予測変数とする重回帰分析を試みた。分析は，有意水準を5％と設定したステップワイズ法で行った。

PIを従属変数とした場合，神経症傾向，開放性，不決断傾向の3つが有意な予測変数であった。この3つの予測変数は，強迫症状の分散の34％を説明していた。一方，OCIを従属変数とした場合は，神経症傾向のみが有意な予測変数であった。神経症傾向は，強迫症状の分散の11％を説明していた。

このように，従属変数として用いた強迫尺度によって結果は異なったものの，少なくともPIが従属変数の場合には神経症傾向と開放性に加えて，不決断傾向は独自の予測力をもちうることが分かった。PIでもOCIでも，神経症傾向が有意な予測変数であったが，これはBarlow et al.（1998）やSexton et al.（2003）の見いだした結果と一貫している。一方，開放性と強迫症状（PI）は予想されなかったものであり，解釈は難しい。

Table 4　不決断傾向とビッグファイブから強迫症状を予測する重回帰分析

	Padua Inventory[a]	Obsessive Compulsive Inventory[b]
ビッグファイブ		
神経症傾向	.39***	.34*
開放性	.18*	
不決断傾向	.33***	
R^2	.34***	.11*

* $p<.05$；***$p<.001$.
[a] $N=127$.
[b] $N=57$.

2．責任の信念および完全主義と不決断傾向の予測力の比較：Frost & Shows（1993）の見いだした，責任の信念および完全主義と不決断傾向との相関は，本研究でも確認された（Table 3）。それでは，これらの相互に関連する予測変数の相対的な予測力はどのようなものであろうか。それを明らかにするために，責任の信念，完全主義，不決断傾向から強迫症状を予測する重回帰分析を行った。分析の手続きは，ビッグファイブを用いた分析と同様である。

PIを従属変数とした場合，責任の信念と不決断傾向の2つが有意な予測変数であった。この2つの予測変数は，強迫症状の分散の31％を説明していた。一方，OCIを従属変数とした場合は，責任の信念のみが有意な予測変数であった。責任の信念は，強迫症状の分散の26％を説明していた。

従属変数として用いた強迫尺度によって結果は異なったが，少なくともPIの場合には責任の信念に加えて，不決断傾向は独自の予測力をもちうることが分かった。PIでもOCIでも，責任の信念が有意な予測変数であったが，これはSalkovskis（1985）による強迫性障

害の認知モデルを支持する結果である。

1と2の結果を総合すると，不決断傾向は一定の増分妥当性をもつと結論出来る。

Table 5 不決断傾向と責任の信念および完全主義から強迫症状を予測する重回帰分析

	Padua Inventory[a]	Obsessiive Compulsive Inventory[b]
責任の信念	.35***	.51***
不決断傾向	.33***	
R^2	.31***	.26*

* $p<.05$；***$p<.001$.

[a] $N=129$.

[b] $N=64$.

認知的統制と不決断傾向との関連 最後に，どのように不決断傾向を低減出来るかについてのヒントを得るために，認知的統制との関連を検討した。Table 3から明らかなように，不決断傾向は認知的統制の「論理的分析」とは負の相関の傾向，「破局的思考の緩和」とは負の相関を示した。よって，認知が過剰にネガティブになることを防げれば，不決断傾向は低減することが分かった。不決断傾向と強迫症状との関連（Table 2，Table 4，Table 5）を踏まえれば，認知的統制のスキルはひいては強迫症状の低減にもつながると期待出来る。

総合的考察

強迫症状と関連の深い意志決定の困難さを，強迫症状に限定されない一般的なパーソナリティ特性として測定する不決断傾向尺度の日本語版を作成し，その信頼性と妥当性を検討した結果，以下のことが明らかになった。

1．不決断傾向は，1因子構造であり，十分な内的整合性を示した。
2．不決断傾向は，強迫症状と正の相関を示した。
3．不決断傾向は，責任の認知および完全主義（ミスを恐れる傾向）との関連を示した。
4．不決断傾向は，一般的なパーソナリティ傾向（ビッグファイブ），あるいは，責任の認知や完全主義といった他の予測変数で説明出来ない強迫症状の分散を説明していた（増分妥当性）。
5．否定的な思考の暴走を防ぐ認知的なスキル（認知的統制尺度の「破局的思考の緩和」）は，不決断傾向を低減出来る可能性が示唆された。

以上の知見を総合すると，不決断傾向は一定の妥当性，特に強迫症状の理解への有用性をもつことが分かった。今後は，臨床群との得点の比較，行動指標による意志決定の困難性との関連，などが重要な検討課題となるだろう。

引用文献

Antony, M. M. 2001 Measures for obsessive-compulsive disorder (pp. 219-243). In M. M. Antony, S. M. Orsillo, & L. Roemer (Eds.), *Practitioner's guide to empirically based measures of anxiety.* New York : Kluwer Academic.

Beck, A. T., Rush, A. J., Shaw, B. F., & Emery, G. 1979 *Cognitive therapy of depression.* New York : Guilford Press. 坂野雄二（監訳）1992 うつ病の認知療法 岩崎学術出版社

Brown, T. A., Chorpita, B. F., & Barlow, D. H. 1998 Structural relationships among dimensions of the DSM-Ⅳ anxiety and mood disorders and dimensions of negative affect, positive affect, and autonomic arousal. *Journal of Abnormal Psychology, 107,* 179-192.

Costa, P.T., Jr. & McCrae, R.R. 1989 *The NEO-PI/NEO-FFI manual supplement.* Odessa, Fla. : Psychological Assessment Resources.

Costa, P.T., Jr. & McCrae, R.R. 1992 *NEO-PI-R professional manual : Revised NEO Personality INVENTRY (NEO-PI-R) and NEO Five-Factor Inventory (NEO-FFI).* Odessa, Fla. : Psychological Assessment Resources.

Foa, E. B., Kozak, M. J., Salkovskis, P. M., Coles, M. E., & Amir, N. (1998). The validation of a new obsessive-compulsive disorder scale : the Obsessive-compulsive Inventory. *Psychological Assessment,* 10, 206-214.

Frost, R. O., & Hartl, T. L. 1996 A cognitive-behavioral model of compulsive hoarding. *Behaviour Research and Therapy,* 34, 341-350.

Frost, R.O., Martin, P., Lahart, C., & Rosenblate, R. 1990 The dimension of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research, 14,* 449-468.

Frost, R.O., & Shows, D. L. 1993 The nature and measurement of compulsive indecisiveness. *Behaviour Research and Therapy, 31,* 683-692.

Reed, G. F. 1976 Indicisiveness in obsessional-compulsive disorder. *British Journal of Social and Clinical Psychology, 1,* 443-445.

Rheaume, J., Freeston, M. H., Dugas, M. J., Letarte, H., & Ladouceur, R. 1995 Perfectionism, responsibility and obsessive-compulsive symptoms. *Behaviour Research and Therapy, 33,* 785-794.

Salkovskis, P. M. 1985 Obsessional-compulsive problems : A cognitive-behavioural analysis. *Behaviour Research and Therapy, 23,* 571-583.

Salkovskis, P. M., Wroe, A. L., Gledhill, A., Morrison, N., Forrester, E., Richards, C., Reynolds, M., & Thorpe, S. 2000 Responsibility attitudes and interpretations are characteristics of obsessive-compulsive disorder. *Behaviour Research and Therapy, 38,* 347-372.

Salzman, L. 1973 *The obsessive personality : Origins, dynamics and therapy.* New York : Jason Anderson 笠原嘉・成田善弘（訳） 1985 強迫パーソナリティー みすず書房

Sanavio, E. 1988 Obsessions and Compulsions : The Padua Inventory. *Behaviour Research and Therapy, 26,* 169-177.

桜井茂男・大谷佳子 1997 “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向及び絶望感との関係 心理学研究，68，179-186.

Sexton, K. A., Norton, P. J., Walker, J. R., & Norton, G. R. 2003 Hierarchical model of

generalized and specific vulnerabilities in anxiety. *Cognitive Behaviour Therapy, 32,* 82-94.
下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑　1999　NEO-PI-R 人格検査・NEO-FFI 人格検査　東京心理.
杉浦知子　印刷中　ストレスを低減する認知的スキルの研究　風間書房
杉浦知子・馬岡清人　2003　女子大学生における認知的統制と抑うつとの関連　健康心理学研究，16．31-42.
杉浦義典　1997　不安認知の二面性―心配の制御と制御困難性　東京大学大学院教育学研究科修士論文（未公刊)。
杉浦義典　2002　強迫性障害　下山晴彦・丹野義彦（編）　講座臨床心理学 3　異常心理学 I　東京大学出版会　pp.81-98.
杉浦義典・丹野義彦　2000　強迫症状の自己記入式質問票―日本語版 Padua Inventory の信頼性と妥当性の検討―　精神科診断学，11，175-189.
辻平治郎・藤島寛・辻斉・夏野良司・向山泰代・山田尚子・森田義宏・秦一士　1997　パーソナリティの特性論と 5 因子モデル―特性の概念，構造，および測定　心理学評論，40，239-259.
和田さゆり　1996　性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成　心理学研究，67，61-67.